

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 金 奈 淑

論文題目 数量が大であることを表す不特定数量詞の意味分析

### 論文審査担当者

主 査 名古屋大学 准教授 李 澤熊

委 員 名古屋大学 教授 靱山 洋介

委 員 名古屋大学 教授 鹿島 央

委 員 名古屋大学 准教授 俵山 雄司

本論文は、現代日本語において数量が大であることを表す語の中から、使用頻度の高い 10 語を取り上げ、個々の語の意味と相互の意味の類似点・相違点について、経験基盤主義に基づく認知言語学のアプローチを用いて明らかにしたものである。なお、考察対象とした語は以下の通りである。

「たくさん」「いっぱい」「たっぷり」「どっさり」「大勢」「多数」「多量」「大量」「数多く」「多く」の 10 語

これらの語は、すべて「数量が大である」ことを表す数量表現であるが、先行研究において個々の語の意味と相互の意味の類似点・相違点が明らかにされているとは言い難い。これらの語が体系的に分析されてこなかった理由の 1 つは、「副詞」「名詞」「形容詞」「形容動詞」というように複数の品詞にまたがっていることなど、これらの語が持つ複雑な性質にあると考えられる。本論文は先行研究を網羅的に整理・検討し、これらの語が現代日本語においてどのように位置付けられているかを明らかにしている。また、豊富な実例を的確に用いて、個々の語の意味と相互の意味の類似点・相違点について、緻密かつ精緻な分析を行っている。

以下、本論文の概要と評価の結果を報告する。

### [本論文の概要]

第 1 章では、研究の目的と考察対象、及び本論文の構成について述べている。

第 2 章では、本論文で考察する数量表現の位置付けを行い、考察対象とする語を「不特定数量詞」として、以下のように位置付けている。

- 1) 「に」や「と」を伴って、あるいは、単独で動詞を修飾する位置に生じ、文中に現れる名詞の数量が大であることを表す不特定数量詞である。
- 2) 名詞を範疇化し個別化する機能を持つ。
- 3) 「の」を介しての連体修飾用法において名詞の数量や属性を表すものや、連用修飾用法において動きの量を表すものも含まれる。

第 3 章では、数量表現の分析に、経験基盤主義をとる認知言語学のアプローチが有効であると考え、認知言語学の基本的な諸概念について分かりやすく概観している。

第 4 章では、考察対象とする語のより詳細な意味分析を行う前提として、下位分類を行っている。検討の結果、以下のように大きく 5 つのグループに分類している。

- 1) モノ名詞の数量を表す「たくさん、多数、大量、多量」
- 2) 出来事、動きの量を表す「たくさん、数多く、多く、多数」
- 3) 人間を表す「大量、大勢、たくさん、数多く、多数」
- 4) 体感に関わる経験を表す「たっぷり」と「どっさり」／空間認知に関わる経験を表す「いっぱい」と「たっぷり」
- 5) 種類を表す「多く」／数量を表す「たくさん」

第 5 章から第 9 章にわたって、第 4 章で行った下位分類に基づき、精緻な意味記述を行っている。以下、概要を述べる。

第5章では、モノ名詞の数量を表す「たくさん、多数、大量、多量」を取り上げ、個々の語の意味と相互の意味の類似点・相違点について分析している。「たくさん」は、特定の形状や特徴を指定せず、さらに具体物・抽象物にかかわらずものの量を不特定に表す無標の表現である。したがって、個別類別詞（「人、個、つ」など）や計量類別詞（「杯、キロ、リットル」など）で数を数えたり、通常量を測ることが想定できない抽象物（「愛情、勇気、憎しみ」など）も対象にとることができる。他方、「大量」と「多量」は、個別類別詞や計量類別詞で表すことが想定できる、すなわち、空間に存在すると想定できる具体物に限られる。さらに、空間に存在する具体物ではないがより具体性の高い（個体として捉えやすい）ものや出来事の場合（例「特徴、検討」など）、「多数」が用いられる。なお、「大量」と「たくさん、多量、多数」には数量の程度差も認められる。このことから、「たくさん、多数、大量、多量」の使用には、文体差、個別化の度合い、具体性（抽象性）、数量の程度の4点が大きく関わっている。また、「大量」と「多量」は、ともに個別性の低い具体物（連続体）と高頻度で共起する。しかし「大量」は有情物を始めとして、個別化の度合いの高い具体物とも共起するのに対して、「多量」は有情物を表すには「大量」より制限が厳しく文脈の支えが必要である。このことから、「多量」は「大量」よりもさらに内部構造を均質なまとまりとして捉える表現であると考えられる。ただし、「大量の人」については「たくさんの人」や「多数の人」よりも使用に制限が見られる。つまり、この4語の表す対象には「多量>大量>多数・たくさん」の順で、特徴的な形と境界、内部構造が失われる度合いが高いという質的な差異が認められる。

第6章では、出来事と動きの量を表す「多く、たくさん、多数、数多く」を取り上げ、実例に基づき、詳しく分析している。まず、「数多く」と「多数」はともに典型的には個別化の度合いの高いものの数を数えるが、「数多く」はものに加えて、動きや出来事といった「動詞」に近い概念を数えることができる。それに対して、「多数」は「動き」は数えることが難しく、「出来事」の中でもよりものに近い出来事（例「検討、治療、活動、遠征」など）を数えるが、「動詞」に近い出来事（例「家出、値上げ」など）を数えることはできない。このことから、「数多く」は時間の流れに沿って数える表現であり、一方「多数」は時間の流れを捨象して一まとまりとしての全体に注目する表現であると捉えられる。逆に、一まとまりの全体に注目し、個々の構成要素が際立たない場合、「数多く」を用いることは難しい。さらに、個別化の度合いの低い感情的な抽象物は、通常個別化ができないとされる。しかし、「数多く」は境界の捉えにくい抽象概念を、主体が体験した出来事として捉えることによって個別化できる。このため、「数多く」は個別化の度合いの低い感情的な抽象物も数えることができる。以上の考察から、「数多く」の個別化には時間軸上で個々の構成要素を数える連続走査が大きく関わっているのに対して、「多数」の個別化には時間軸上のプロセスが捨象され、一まとまりのものとして数える累積走査が大きく関わっていると考えられる。そして、この両語の個別化の仕方の違いが両語の意味の違いをもたらしていると考えられる。

次に、「数多く」と「たくさん、多く」については、連用修飾用法において出来事や動きの

量を表す場合、「数多く」はあくまでも動きの構成要素に注目し、一つ一つ数えるのに対して、「たくさん、多く」は動きや出来事の量を結果的に一まとまりとして表す。

最後に、「たくさん」と「多く」は同じく出来事や動きの量を一まとまりとして表すことができるが、「たくさん」は頻度・回数を表すことは難しいのに対し、「多く」は、頻度・回数（が大であること）を表すことによって対象の特徴を述べる属性叙述に用いられ、総称的な意味を表す用法がある。

第7章では、人間を表す「大量、大勢、たくさん、数多く、多数」の5語を考察対象とし、これら5語の使用を決定付ける要因を明らかにしている。「大量、大勢、たくさん、数多く、多数」の使い分けは、文体差のみならず、同じ対象（人間）に対して、個体として捉えるか連続体として捉えるか、さらに、空間に存在する具体的な存在として捉えるか出来事のような抽象的概念として捉えるかという存在論的カテゴリーの違いを反映していることが明らかになった。また、個々に注目するか、一まとまりとして捉えるかという構成要素の際立ちに差があることも指摘している。つまり、これらの語の使い分けは、人間という客観的事実の投影ではなく、あくまで話し手が主体的に「人間」を捉えてゆく認知活動に基づいていると考えられる。

第8章では、「どっさり、たっぷり、いっぱい」を取り上げ、3語の個別の意味と相互の意味の類似点・相違点について考察している。分析の結果、「たっぷり」と「どっさり」は「体感に関わる経験」に大きく関わり、「たっぷり」と「いっぱい」は「空間認知に関わる経験」に大きく関わる表現であり、身体的な経験がこれら3語の意味の基盤になっていることを明らかにしている。

第9章では、「多く」と「たくさん」を取り上げ、相互の意味の類似点と相違点について考察している。分析の結果、両語には個別化の違いが認められた。すなわち、数量の捉え方において、基本的に「多く」は、母集合やスケール上での相対的な判断を示すことから、比較の基準が明示されるか、あるいは想定できなければならないという制約がある。しかし、対象の属性を述べると捉えられる場合にはこの制約が無効になり、話し手が基準の明示なしにその量が大きであると判断できる。そしてその場合、「たくさん」とほぼ同じ意味で置き換えることができる。一方、「たくさん」は母集合を前提とせず、単独で一般的な基準によって量を判断する表現であり、叙述の類型にかかわらず用いることができる。さらに、連体修飾用法「たくさんN」はあくまでもNの数量を表すのに対して、「多くのN」は種類を表し、総称名詞句として範疇化機能を有する用法を持つ。そして、この違いは母集合を前提とするか否かという「多く」と「たくさん」の本来の意味に動機付けられていると考えられる。

第10章では、本論文のまとめと今後の課題について述べている。

### **[本論文の評価]**

本論文は、現代日本語において数量が大であることを表す不特定数量詞10語の個別の意味と相互の意味の類似点・相違点を明らかにした好論文である。本論文が高く評価できるのは以

別紙 1 - 2

下のような点である。まず、数量表現に関する膨大な先行研究が十分に整理・検討されており、問題点などの指摘も妥当である。また、本論文の理論的基盤である認知言語学の諸概念について分かりやすく整理・検討されており、論文の構成もしっかりしている。さらに、個々の語の意味と類義語間の意味の違いについては、従来の研究よりも精緻な分析がなされており、記述に説得力がある。

一方、審査員からは以下のような指摘もあった。まず、多義語分析の観点からはさらに考察を深める必要がある。特に、プロトタイプの意味を含めた別義の認定については、例えば具体的な言語事実を示すなど、より説得力のある記述が求められる。また、数量詞と類別詞の関係、特に相違点についてはさらに詳しく考察する必要がある。しかし、上記のようなさらに検討・改善すべき点はあるものの、全体的に非常にまとまりのあるものに仕上がっており、完成度の高い論文であると評価できる。また、現代日本語の数量表現の意味研究の一助となったことも高く評価できる。

以上の評価に基づき、審査員は全員一致して、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。